

誰かに教えたくなる 科学技術の話 102

地名に記録される歴史



東京大学名誉教授 月尾 嘉男

ノーベル生理学・医学賞を受賞したオーストリアの動物行動学者K・フォン・フリッツシュはミツバチが空中で特定の飛翔をして仲間にエサのある位置を伝達する能力があることを発見して有名であるが、そのような能力のない人間は特定の場所の歴史や意味を地名として伝達してきた。この地名は日本には一〇〇万以上あるとされるが、長期の歴史を反映した地名の数例を紹介したい。

鳴門（山口県柳井市―周防大島町）

「鳴門」という地名は高速の海流によって轟音のする海峡を意味し、一般には徳島県鳴門市と兵庫県淡路島の中間の鳴門海峡が有名である。しかし、山口県大島町（現在は合併して柳井市）と対岸の周防大島の中間にある大島瀬戸は奈良時代に編纂された『万葉集』にも名前が「鳴門」として何度も登場しており、急速な潮流により瀬戸内海航路の難所として有名であった。

それを証明する事例として、足利義満が康応元（一三八九）年に厳島神社に参詣してから西方に移動したときには夜間の航海を回避して手前の海上で停泊して待機していたし、用明天皇の皇女の般若



鳴門

が筑紫から京都に旅行したときには、鳴門で遭難して死亡している。しかし航海の難所であった鳴門も一九七六年に全長一〇二〇メートルの**大島大橋**が架橋され、安全に横断できるようになった。

樁海（千葉県東庄町・旭市・匝瑳市）

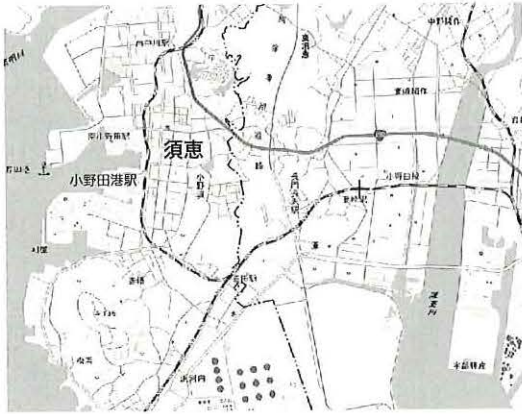
関東平野の東部を流下する利根川の流路延長は日本二位であるが、流域面積は一位であり、下流には広大な沖積平野が形成されている。江戸時代以前には数多くの湖沼があり、面積が最大であったのは東京の山手線内の面積に匹敵する七二平方キロの「**樁海**」であった。江戸時代



樫海（海面上昇7mの地図）

初期から干拓が進行して現在では跡形もないが、**寄島**、**水門**、**岸湖**などの地名が干拓以前の環境を伝承している。

当時も干拓には反対があったが、急速に人口が増加した江戸に食料を供給するという目的もあって幕府が干拓を強行し、延八万人の人手が動員されて三年で湖沼は消滅した。しかし雨水を調整する機能が喪失した結果、一帯は渇水と洪水に交互に見舞われる一方、田畑の塩害も発生し、自然を改造することの問題を人々が認識する契機となった。魅力ある名前とは裏腹の環境改造である。



須恵

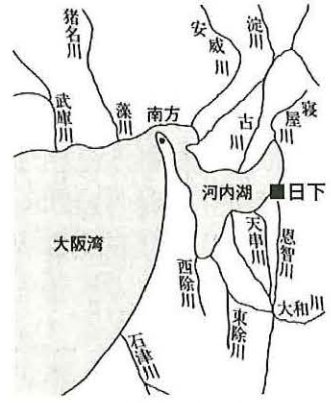
須恵（山口県山陽小野田市）

縄文時代の土器は焼成温度が九〇〇度以下の低温であったため強度が十分ではなかったが、古墳時代以後に朝鮮半島から渡来した技術を使用した陶器は**須恵器**と名付けられ、轆轤を使用して成形されて焼成温度も一二〇〇度前後であるため硬質であった。その技術を使用して作陶した場所には「**須恵**」という地名が記録されており、国内の各地に存在するが、一例が山陽小野田市にある須恵である。

小野田港の背後の市街に須恵という地名の街区があるが、神功皇后が朝鮮出兵の途上で寄港して、当時は**洲江**であった地名を万代繁栄するように須恵にしたという伝承がある。この土地には陶土だけではなく、近世後期になって石炭の埋蔵も発見され、一八八一年に両者を資源とする日本最初のセメント会社（小野田セメント）が設立され、化学産業の一大拠点に発展していった。

目下（大阪府東大阪市）

六〇〇〇年前以前の縄文時代は現在より海面が数メートル上昇しており、大阪湾の前身である**河内湾**は生駒山麓まで侵入していた。しかし古墳時代になると海面が低下して河内湾は河内湖になり、さらなる海面の低下によって湖岸に「**草香江（目下江）**」という入江が誕生した。大伴旅人が大宰府からの帰京途中に「草香江の／入江にあさる／若鶴の／あなたづたづし／友なしにして」と表現している。この故事からも推測できるように、古墳時代以後、目下は大和平野に建設された平城京に到達するための重要な拠点になり、『万葉集』の長歌の一部にも「おし照る難波を過ぎて／うちなびく／草香



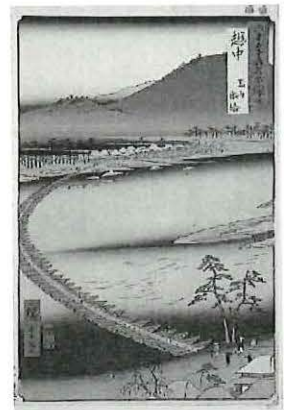
古代の大坂

の山を／夕暮に／わが超え来れば」と登場している。しかし淀川を筆頭に何本もの河川が大量の土砂を大阪湾に運搬して広大な平野が形成され、当時間を想像させるのは地名のみである。

富山船橋 (富山県富山市)

歌川広重の全国の名勝を描写した『六十余州名所図会』に「越中富山船橋」という作品がある。江戸時代の土木技術では雪解け時期に急流になる神通川に架橋するのは困難であり、六四艘の小舟を連結して急流を横断できるようにした舟橋が慶長年間に構築された。広重は現地を旅行したわけではなく、測上旭江の『山水奇観』を下敷きにしているが、広重の画力を発揮した見事な光景である。

土木技術の遺産としては重要な船橋も



越中富山船橋

明治十六（一八八三）年に木製の神通橋（現在は鉄製の神通大橋）が架橋されて二八〇年の歴史を終了した。しかし現在も右岸には舟橋今町という町名が存在している。これ以外に天正六（一五七八）年には越前福井の九頭竜川に、寛文九（一六六九）年には奥州盛岡の北上川に舟橋が設置され、架橋技術が発達していなかった時代には重要な技術であった。

鮎川 (宮城県石巻市)

宮城県石巻市の牡鹿半島の先端にある「鮎川」の前面の金華山沖と名付けられる一帯は寒流と暖流が衝突するため世界三大漁場の一所とされる場所で、マッコウクジラを代表とするクジラが回遊してくるので鮎川は捕鯨基地として発展した。戦後の食料不足の時代にはクジラは貴重



鮎川

な蛋白質源であったが付近の貝塚からもクジラの化石などが発見され、古代から食用とされていたことが判明している。

鮎川で捕鯨が発達になったのは明治四一（一九〇八）年に土佐捕鯨会社（現在の大洋漁業）が鮎川を基地として金華山沖でマッコウクジラ漁を開始したことによる。以後、近海捕鯨が活発となり、昭和二十八（一九五三）年頃には年間六〇〇〇頭が水揚げされるほどになった。しかし一九八二年に国際捕鯨委員会が商業捕鯨の一時停止を採択し、日本も商業捕鯨活動を停止した（二〇一九年から再開）。

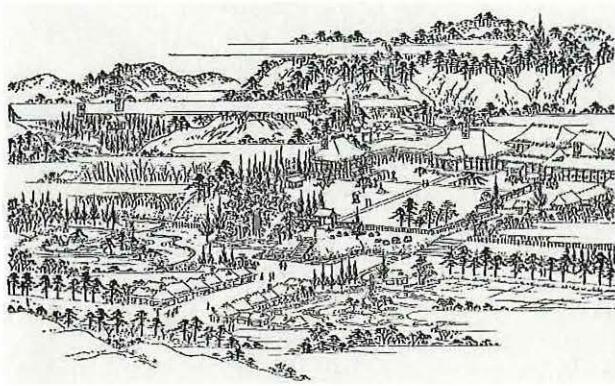
木場 (佐賀県伊万里市)

伊万里市の西部には伊万里湾があり海



岸のある地域であるが、北部から東部に
かけては大野岳（標高四二四メートル）
や城古岳（四〇四メートル）のある山地
で、それを反映して「木場」のつく地名
が六〇カ所ほどある。これは山中で伐採
した木材を一時保管する場所を意味して
いたが、焼畑農地の意味でも使用され、
平地のない山間地域で苦勞して農業をし
ていた様子が想像できる。

日本列島は各地で脊梁山脈が貫通して
いる。そのため国土の約七五%が山地と
いう構造であり、大河の周囲の堆積平野
を例外として大半は山地を開拓して穀物
を栽培していた。九州の山地では焼畑で
造成した畑地は「コバ」という名前であ
るが、それ以外の地域では「ソリ」「サス」



深大寺（調布市）

「ナギ」「カノ」「ヤキ」なども表現さ
れている。全国各地で山地を開拓して作
物を栽培してきた歴史を明示している。

調布（東京都調布市）

東京の西郊にある「調布」は新興の住
宅地域という印象であるが、野川遺跡な
ど石器時代の遺跡も存在するように古代
から人々が生活していた一帯である。そ

の名称も七世紀から八世紀の律令時代に
租税である「調」を「布」で納付してい
たことに由来し、万葉集にも一帯が布地
の産地であったことを示す和歌が記録さ
れている。天平五（七三三）年に開山さ
れた深大寺も地域の歴史を証明している。

以後、鎌倉時代になると幕府直轄の
「関東御分国」になり、江戸時代には甲
州街道が通過し、国領、下布田、上布田、
下石原、上石原の布田五宿が設置され発
展した。明治時代以後は廃藩置県により
帰属が何度も変化したが、戦後の全国規
模の市町村合併が進展し、紆余曲折があ
ったものの、一九五五年に調布町と神代
町が合併して調布市となり、現在は人口
二五万人の大都市となっている。

今回は八例を紹介したが、それらから
地名は地域の長期の歴史を反映してい
ることが理解できる。しかし町村合併が代
表であるが、これまで当面の利便を確保
するために大量の地名が社会から抹消さ
れてきた。その結果、何千年間という長
期に維持されてきた地域の歴史の記録が
消滅、場合によっては破壊されてきたの
が地名の改正である。社会における歴史
の意味を再考すべきである。